

## オープン カレッジ

愛知、岐阜、三重の東海3県の私立大学62校(2025年現在)のうち、10年後、少子化の大波を跳ね返すことができる大学は何校かを予測することは難しいが、「偏差値の低い大学から潰れていくのでは?」「高校生に人気のない領域を有する大学は募集停止を余儀なくされるのでは?」といったような推測が語られている。

ただし、必ずしもその通りに進むとは限らないだろう。何が起るかわからないのが世の常である。しかし、18歳人口が横ばいで推

### 大学サバイバル時代の留学生受け入れ課題

いない。まさに最後のサバイバルの時代である。

学部改組、キャンパス移転、校舎のリニューアルなど、この限られた時間のなかで、一人でも多くの高校生を確保するための戦略が積極的に実施されるだろうが、同時に、留学生の受け入れも、一つの焦点になることが予想される。ただし、闇雲に留学生なら誰でもよいというわけにはいかない。数合わせだけを目的とした受け入れは、もはや時代遅れである。そもそも勉強よりもお金儲けを目的とした留学生はそれほど多くはない。

円安が進むなかで、日本の経済力に依存するような戦略を立てることはできない。むしろ留学生市場で少

ない。円安が進むなかで、日本の経済力に依存するような戦略を立てることはできない。むしろ留学生市場で少

## 教育の質

### 向上の視点から

移する29年までの5年間、

有効な対策を打ち出すことができるかどうかの一つの分かれ道になることは間違



日本福祉大学経済学部  
教授 学長補佐  
原田 忠直

はらた・ただなお 応用経済学、アジア経済論。愛知大学大学院中国研究科中国研究専攻。博士(中国研究)。1963年生まれ。

しても優位に立つためには、教育、研究の質の向上、

生活面、就職指導などのサポート体制の充実が不可欠である。言い換えれば、留学生の確保とは、私立大学の質そのものが世界に晒されることを意味する。少なくとも学費を安くし、学士号を簡単に付与するような大学は淘汰されることになるだろう。

今後、留学生の受け入れを行う大学では、厳しくも

を考える必要がある。

言語力だけが、人間の能力を計る指針ではない時代が迫り来るなかで、留学生だけではなく、日本人学生も同様に、最先端の技術を屈指しながら、大学という一つの実験場で、ともに学び、新たな時代を生き抜くための人材を養成することができるとは、少子化を生き抜いてくための大学に残された道ではな

ろうか。